
足抜け花魁の珍道中

天呼 洸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

足抜け花魁の珍道中

【Nコード】

N9897T

【作者名】

天呼 洸

【あらすじ】

時は江戸時代……

『白鶴太夫』と言われた花魁がいた。

十三年と月日が経ち、花魁の『花』字の御徳、誰にも見向きもされなくなり、返済金も返せなくなった白鶴……

女郎家業に嫌気がさし、計画してた『足抜け』を決行し旅を始める。

狸の恩返しや、間抜けな役者……様々な珍事件に巻き込まれ、お気軽道楽に旅を続ける花魁。

でもそんな白鶴、実は……

花魁『白鶴太夫』（前書き）

色々思う処があつて、書き直しました。

兎に角、気持ちいい馬鹿話を書きたいと思つてます。

基本的に前作内容は変えてません。ここまでは……

誤字等は後日修正します…… z z z z z

花魁『白鶴太夫』

アタシが初めて江戸の吉原に着たのは、今から十三年前……

貧乏で借金塗れで有名な尾張のインチキ和尚に「お雪。江戸まで行って芝居を観ないか？」と突然誘われた。

何故アタシが誘われたかは、偶々でも偶然でもなく、そのインチキ坊主と一緒に暮らしてたからだ。

まあ、兄弟でも夫婦でも無いんだけど……アタシがそのインチキ坊主の寺に居候？していたのがいけなかったのだろう。

半ば強引に和尚に手を引かれ、東海道を歩きながら食べたり飲んだり、和氣藹々と旅をしながら、江戸に到着する。

さあ、歌舞伎座に一直線つと思いきや、何故か吉原まで和尚に力強く手を引かれ連れてかれる。

「つと言う訳で、スマンなお雪」

「……は？」

謝りの言葉を言いながら全然悪びれてない顔で和尚は笑って言う。
江戸に着いてから、和尚の態度の変貌に戸惑いを隠せないアタシは、鳩の目の様に呆然と和尚を見つめる事しか出来なかった。

陰気臭い和室に、陰気臭い女性が煙草を吸いながら上座にドツシリ腰を下ろし、アタシを舐めるように見ている。

「中々の上玉じゃないか尾張の旦那」

煙を吹かしながら女性は和尚を褒める。

「でしょ？女将？だからお願いしますよ」

和尚はその陰気臭い女性を『女将』と呼びぺこぺこと頭を下げる。
「ふん。しょうがないねえ。ほら受け取りな」

「有難う御座いますう」

女将は横に置いてあつた千両箱から二十両ほど取り出し和尚に渡す。

「旦那、坊主くせにいい目してるじゃないか。こんな上玉を……神さんから罰が当たつても知らないよ」

つと女将が悪そうな顔してニヤニヤ笑いながら言うと、和尚はへツと鼻で笑いながら……

「神様が怖くて和尚が出来るかつて言うの……怖かったらお雪なんか売らないって」

つと受け取つたお金を懷に仕舞う。

そんな二人のやり取りを見ながら、アタシは呆然としてると、女将が煙草盆の灰吹きのみちを煙管で叩き、ふうくとまた煙を吹かしながら、アタシを見る。

「お雪だつたかいアンタ？まだ気付いて無い様だから言うけど、アンタね……その和尚に売られたんだよ」

………ッ！！

つと、まあ……少し考えれば和尚が江戸に連れてつてくれるだけで怪しいつと思つてはいたが……まさか、アタシを売る為に江戸に来ると思ひもしなかつたわ……

勿論、売られた分かつた直後、和尚に一・二発殴り飛ばしその場で大暴れ。外で待機していたヤクザ者が暴れるアタシを取り押さえるようすが、そんなヤクザをアタシはタコ殴りにする。

暫くして落ち着き、和尚はアタシがヤクザ者をタコ殴りにしている隙に、さつさと逃げてしまい、行く所が無かつたアタシはこの吉原『花鳥屋』で『お雪』から『白鶴』と名を変えて働く事にした。

それから十三年……

なんだかんだで、半年ぐらいで花魁の『太夫』までアタシは昇り詰め、女郎家業で最高潮を味わった。

しかし、十三年も月日が経てば、太夫とは言え、指名客は減り、花魁の花の字御徳、枯れた花の様な目でアタシを見る。

足を洗ってどこか旅したいっと思っても、この十三年働いているのにちつとも返済金額に到達出来ない。……宿泊料とか食事代、衣装代等なんやかんやで、女将がお給金から持っていきやがるんだ。

一層の事、足抜けしようと考えてはいるのだが……女郎家業で足抜けは至難の業。店の前でヤクザ者が昼も夜も見張っており、抜け出すにも難しいのだ。

それに、足抜けしても地回りがしつこく追っかけて来るので逃げる方も色々大変である。

日々なんかいい名案は思い浮かばないか、悩んではいるのだが……

今夜も指名が無く暇なんだろうなあ……つと夕方位の時、花鳥屋のお抱えヤクザ『三郎一家』の三下、与助を捕まえ店外でアタシは暇潰しに将棋を指してみた。

勝負は与助がいとも簡単にどんどん責められアタシが一方的に優勢。

「……くっそ……ちつくしょー……どーしたらいいんだ？」

「……ふあわあ……」

与助は将棋盤を真剣に見ながら次の手を悩む。そんなアタシはあまりにも弱い与助に欠伸をし、吉原で女を買い客達を見つめる。

数年前位はアタシも人氣があつて、どこその殿様や御武家様、金持ち商人に相手にして貰ったのに、今やこうして外でヤクザと将棋してても誰も相手にしやしない……本当、寂しくなつたもんだよ……

「あゝくそッ！太夫ッ！！何持つてるんだい？」

考えに煮詰まったのか、与助はアタシに捕った駒を尋ねる。

その問いにアタシは嫌気が差し、ハンッと溜め息を吐く。

「いい加減にしなよ。何度目だい？いいかい。桂馬、香車、角に金

将と銀将、歩が3つ……」

捕った駒をアタシは苛立ちながら、順番に与助に見せて行く。そして最後に捕った駒をバシッと今座っている腰掛に叩いて見せる。

「王将ッ！！」

「王将！？太夫、俺の王将捕っちゃったの！？」

鳩が豆鉄砲でも喰らったかの様な啞然とした表情で与助は甲高い声を出しながら王将とアタシを見る。

実は勝負は既に着いている……前の手でアタシが与助の大手飛車取りつと攻めたら、この与助バカ「そうは問屋が下ろさせねえ」っと王将では無く飛車を逃がし何故が続けている。

どーしていいのかわかんなくなってしまったアタシは仕方が無く適当に続けている。

「はぁ……与助。もういいだろう？」

呆れたアタシは与助に勝負の終止を促すが……

「いやいや太夫。こーなったら何が何でも飛車は取らせねえ。王将が無くつたってこの勝負勝ってやらあゝ」

っと何がコイツを熱くするのか、ますます意気込んで勝負に滑り込む。

頭が痛くなりそう……

呆れて溜め息吐きながら再び吉原で女を買う客を眺めていると……隣の店から知り合いの飴細工職人『小次郎』が出てくるのが目に入った。

しかも客が出入りする専用口では無く、裏口からだ……

妙だな……っと思ひアタシは小次郎に声を掛けなくなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9897t/>

足抜け花魁の珍道中

2011年6月11日04時40分発行